

令和の即位礼と大新嘗祭

——高御座と米・粟に見る日本の伝統文化——

所 功

このたび御代替わりを迎えて、皇室儀式の持つ意味を多くの方々に理解いただきたいという思いから、モラロジー研究所で「奉祝記念特別展」を開催しましたところ、予想を遥かに超える多くの皆様にお越しいただき、感謝しております。

私ども研究者としては、いろいろ学び考えたことを、じっくり聞いてもらえる場があるのは非常にありがたいことです。しかも、本当のことが分かれば、それを大事にしていこうという思いも強くなります。今日の講演会が、そんな機会になればと念じております。

明るく晴れやかな御代替わり

今日（六月九日）は、新しい天皇陛下と皇后陛下の御結婚記念日です。平成五（一九九三）年のあの日、ご結婚されて、そ

の後二十六年のご生活が始まったわけですから、明治以降の皇室典範が、天皇の終身御在位を規定していますから、私どもは「平成」の御代がまだまだ続くと想っております。

けれども、平成の天皇陛下は二十八年八月、テレビでビデオメッセージを通じて「お言葉」を述べられました。その中で「象徴」としての役割を一所懸命に務めてきたが、すでに八十歳代の高齢者となり、いつまでも十分な務めができるわけではないから、次の若い世代へバトンタッチすることが望ましい、というご意向を表明されました。

それを視聴した大多数の国民は、陛下のご意向をよく理解し、強い共感を示しました。そこで、まもなく政府も国会も動き始め、ついにこのたびの御譲位と、新天皇の御即位が実現するに至ったわけでありませう。

年輩の方々は三十年前をご記憶でしょうが、あの時の実に辛い悲しい御代替わりと違って、今回は明るい晴れやかな御代替わりとなりました。漠然と「そうなるかな」と想っていました。が、予想を遙かに超えて、「御代替わりとは、こういう明るい晴れやかな雰囲気を迎えられるものか」という感動がこみあげてきました。今回の御代替わりには、若い人々も、よい意味でお祭り気分のように盛り上がりましたね。

これは、まさに上皇となられました陛下のお陰であります。明治以降の制度と異り、それ以前には六四五年から一八一七年までの間に六十回近く再三あった「御譲位」というかたちを取り得る、ということをお示しにられたわけです。

政府は当初やや及び腰でしたが、まもなく有識者会議を設け、専門家などから参考意見も聞いて、法案の準備に取り組んでいます。しかも、国会では、衆参正副議長が与野党の意見をまとめて、事前に合意を形成しました。そのおかげで、「皇室典範特例法」は翌二十九年六月、衆参両院とも出席者全員の賛成により可決されました。

この特例法が施行されて、新しい御代がスタートしました。これから十月二十二日昼に即位礼、十一月十四日夜分に大嘗祭が行なわれます。この大事な儀式と祭祀をどのように考えたらいいのか。それを皆さんと一緒に探ってみたいと思います。

今日は時間が限られていますから、重点の一つは、即位礼の

正殿の儀で使われる「高御座」の来歴について、もう一つは、大嘗祭で神饌として「米」とともに供えられる「粟」の重要性について、お話をさせていただきます。

元号という漢字文化の意義

その前に、いわば序として、このたび「令和」と改元されましたので、元号の意義に触れておきます。

念のため、四十年前前を振り返ってみますと、政界でも論壇でも、「元号なんていらぬ」とか「元号はなくすべきだ」というようなことを声高に叫ぶ人がたくさんいました。

ところが今回は、ほとんどの人々が「元号は大事だ」と考え、「あるのが当然」と思っているようです。それに呼応してマスコミも大いに報道し、多くの国民も新元号を歓迎している様子を見て、深い感慨を覚えます。

今やまさに国際化社会ですから、西暦を使うことが多くなっています。それはそれでかまいませんが、ぜひ元号の意義を忘れないでほしいと思います。

実は平成六（一九九四）年に政府が「公文書の年表記に関する規則」を決定し、「原則として元号を用いるものとする。但し西暦による表記を適当と認める場合は、西暦を併記するものとする」と明示しています。これが政府の公式見解として打ち出されているのです。

従って、政府も地方自治体も公的な機関なども、そうであるべきはずなのですが、実態は必ずしもそうではありません。昭和五十四（一九七九）年「元号法」ができる以前から、政府は公的な文書などに元号を尊重する方針をとりながら、それを徹底してきませんでした。

こんな状態で今後どうなるのかと思っておりましたところ、すでに全国の数県において、公文書は元号を優先し、カッコで西暦を併記する、という方式をとろうと決めています。今後、これが全国に広まっていくことを願っています。

わが国では、千三百年以上、独自の年号（元号）を公式に作り使ってきました。この伝統的な漢字文化を大事にしながら、他方で国際的に通用しやすい西暦も活用する、という在り方が望ましいと考えています。

およそ元号は、地域に根ざした「文化」としての意味をもちますし、西暦には地域を越えた「文明」としての意義があります。いまや日本にしかない元号を、みんなで大切にしていきたいと思っています。

御代替わりの踐祚式・即位礼・大嘗祭

もう一つ、本論の前に、従来の御代替わりでは、どのようなことが、いつどこで行なわれてきたのかについて、少し触れておきます。

おおまかに申しますと、一つは、「踐祚式」と呼ばれてきたものがあります。平成と今回は、それを「劍璽等承継の儀」とストレートに称していますが、いわゆる三種の神器、戦後の「皇室経済法」では「皇位と共に伝わるべき由緒あるもの」の代表として、宝剣と勾玉、および国事に使われる公印の「天皇御璽」と「大日本国璽」を、新天皇が承継される儀式です。つぎに「即位礼」があります。そのうえで「大嘗祭」が行なわれます。その前後にいくつもの儀式や行事がありますけれども、以上の三つを中心に見ていきます。

これらは前近代も、近現代の明治・大正・昭和・平成も、今回も、基本的に同じで、一括「大礼」と称されます。

とはいえ、若干の違いもみられます。とりわけ即位式は、千年あまり京都の御所で行なわれ、明治元年（一八六八）の即位式も京都御所でした。ところが、明治天皇は翌二年、東京へお遷りになり、旧江戸城が皇居となりましたから、同四（一八七一）年の大嘗祭は初めて東京で行なわれたのです。

これは大変なことです。千年以上も京都でやってきたことを東京で行なうというのは「中心」が変わるわけです。従いまして、大嘗祭に必要な神饌を用意する地方は、それまで京都より東の代表を悠紀国、西の代表を主基国と称し定めてきました。が、新しく東京を中心にしてどう決めたらいいのか、大問題になったのです。

結局、明治の大嘗祭では、悠紀国が今の山梨県、主基国が今の千葉県になりました。なぜそうなったのか公式記録に見あたりませんが、ある公家出身官人の書き付けに、伊勢の神宮に近い方が悠紀、それより遠いほうが主基とされたように記されている由を、宮内庁関係者から伝え聞いております。

明治天皇の叡慮による京都の大礼

しかし、大正と昭和は、即位礼も大嘗祭も、ふたたび京都が舞台となりました。東京へお移りになって数十年経っていますから、東京でなさって当然だったかもしれません。

ところが、ふたたび京都で行なわれたのです。それはなぜかといえば、明治天皇の格別なご叡慮により決まったのです。

実は明治二年の東京奠都によって、京都は火が消えたように寂しくなりました。明治十（一九七七）年、父君孝明天皇の十年祭にお出ましの天皇は、その寂れた京都をご覧になり心配されました。そして翌十一年、ふたたび京都へお出ましの際、「将来の即位礼や大嘗祭は京都でやるようにしたらどうか」と仰せられたのです。

なぜそんなことを思いつかれたかという点、その頃、ロシア帝国の皇帝は、ふだん新都のペテルブルグにいながら、戴冠式は古都のモスクワで行なわれていました。古都も新都も大事にされていたのです。

それゆえ日本においても、古来の京都を大切にすることを示そうとされたわけです。そのお陰で、明治二十二（一八八九）年制定の「皇室典範」に、将来の「即位礼及び大嘗祭は京都においてこれを行ふ」と明文化されました。

それに基づいて、大正四（一九一五）年十一月、さらに昭和三（一九二八）年十一月のそれは、京都において行なわれたのです。これによって、京都は皇室にとって代始の最も重要な大礼の行なわれる皇宮のある処、つまり名実ともに「ミヤコ（宮処）」京都として復活できたことを忘れてはなりません。

即位礼は高御座で国内外に即位を宣明

それでは、これから本論に入ります。まず即位礼で最も重要な「高御座」についてお話いたします。

先ほど、大正と昭和の即位礼は京都で行なわれたと申しましたが、その法的根拠となる旧皇室典範の規定が戦後の新典範から削除されてしまいました。そこで平成の即位礼は初めて東京の皇居において行なわれたのです。

平成二（一九九〇）年十一月十二日、皇居正殿の「松の間」で、両陛下と成年皇族方および三権の長が並び立ち、その中庭の周囲に海外一五八国などの来賓夫妻と国内各界代表夫妻などの参列する前で、御即位の披露を行なわれました。

この即位礼において最も注目されるのは、天皇陛下が高御座

でお立ちになり、即位したことを内外に宣明されることです。しかし、その重要な高御座は普段、京都御所の紫宸殿という大きな建物の中央に、皇后陛下の立たれる御帳台みちやうだいと共に置かれています。

これを京都から東京まで運ぶのは、大変な作業です。すべて木組みになっていますから、慎重に解体して運ばれました。当時はゆるる過激派に妨害されることも懸念されましたから、自衛隊のヘリコプターで移送されました。

しかし今回は、解体したものを大きな運搬車に載せ、高速道を通って運ばれ、いま本格的な修理が施されています。

ともあれ、即位礼には高御座が不可欠です。それが今日でも京都御所の紫宸殿に置かれており、即位礼において東京の皇居へ運ばれ使用されていることは、伝統を重んずる日本の皇室にふさわしい在り方だと思われれます。

千三百年来の日本的な高御座

この高御座に相当するものは、古代の日本が手本とした中国にあったかどうか、調べてみますと、小高い壇はあったようです。それは土壇、つまり土で造られ、その壇に上って即位を宣言していたものとみられます（『後漢書』光武帝建武元（二一五年夏四月条など））。

一方、わが国の古代史料を見ますと、少なくとも五世紀頃に

は、「壇」を設けて即位を宣明されることがあったようです。『日本書紀』の雄略天皇即位前紀丙申（四五六）年十一月甲子条に「天皇壇を泊瀬はせの朝倉に設け、天皇位に即きたまふ」と記されています。

ついで『続日本紀』の文武天皇元（六九七）年九月庚辰条に引く詔に「天日嗣の高御座と……大八嶋国知所」と記されています。これ以外にも「高御座」という表記はしばしば詔に出てまいります。その多くは皇位を形容する言葉として使われています。

しかし、八世紀初めの大宝元（七〇一）年ころには、玉座としての高御座があったと考えられます。それは一代一度の即位式と同様の儀式が、毎年元日に「朝賀」の儀として行なわれるようになりました。文武百官が大極殿の前にずらっと並びまして、殿上の天皇に新年の祝賀を表す晴れやかな儀式が、当初初めて儀容を整え行なわれた、と明記されていますから、その際、文武天皇は御高座へお出ましになったとみられます。

ただ、明確に玉座としての高御座があったことを示すのは、『続日本紀』聖武天皇の天平十六（七四四）年二月甲寅条に「恭仁宮くいにのみやの高御座並びに大楯なむのむかを難波宮へ運ぶ」と明記されています。いま我々のイメージするような高御座があり、再三、宮遷しをされた聖武天皇が、それを恭仁宮から難波宮へ運ばせられたことがわかります。

さらに平安宮の時代になりますと、かなり具体的な高御座の形状を示す史料がたくさんあります。その一つが『延喜式』です。これは十世紀の初め、醍醐天皇の勅命により編集された律令法の詳しい施行細則を集成したものです。

その中の「内匠寮式」に「元正（朝賀式）……大極殿の高御座（蓋（屋根）八角に作る。角別上に小鳳像を立て、下に懸くるに玉幡を以てす。面ごとに鏡三面を懸く。頂（内上）に大鏡一面を着け、蓋の上に大鳳形を立つ。惣て鳳形九隻、鏡二十五面、幔台十二基、高御座の東西各四面に立つ」とみえます。これによって、いま見る高御座と同じようなものがあつたことを知ることができます。

やがて、これを絵図にした史料もみられます。現存本の写しは十五世紀中ごろ室町中期の『文安御即位調度図』ですが、その中味は十二世紀の平安末期にあつた絵図を模写したものだともなされています。

それから江戸時代になりますと、水戸の徳川光圀公が朝廷の儀式に関する膨大な記録を集成分類して、五百五十巻の『礼儀類典』という一大史料集を作りました。その上に大変よくできた「絵図」三巻もあり、そこに高御座の図がみえます。

その後、さらに詳しく史料を考証したものととして、文化十四（二八一七）年に平胤禄が注進した『高御座考証』があります。文化十四年といえ、一一九代の光格天皇が讓位されまして、

次の仁孝天皇が踐祚された年ですから、その即位式に役立てられたものとみられます。

江戸幕府の援助で復興した朝廷の儀式

こうしたものが江戸時代にできたのはなぜかを考えてみます。戦国時代から江戸前期ごろまでの朝廷は、いろんな事情で建物も貧弱になり、室礼もままならなくなっていました。

紫宸殿の高御座も、果たして本来の姿であつたかどうか。だいたい似たものを設けられていたでしょうが、戦国から江戸にかけて、本来のものより貧弱になっていった。御所そのものが、みすばらしい状況になっていったのです。京都の御所は、戦国の世になると、外から中が見えたというくらい粗末な状況になっていました。

それを残念に思われたのが江戸前期の歴代天皇です。とくに後水尾天皇の遺志を継がれた霊元天皇（一六五四～一七三二）は、在位中から讓位後にかけて、本来の御所と儀式を何とか復興したいと考えられ、それがだんだん幕府側に理解されるよう努力されました。

当時の朝廷には、経済力も政治力もほとんどありませんので、幕府から資金を出してもらうほかない。ですから、復活したいと考えられても、なかなかうまくいかなかったようです。

とりわけ多くの費用と人手を要する大嘗祭は、戦国期の後土

御門天皇から二百年以上できなくなっていました。しかし、靈元天皇は讓位された際（一六八七年）、次の東山天皇のために、即位式を節約して簡素に行なうから、浮かせた費用で大嘗祭をやりたいと仰せられ、なんとか復興されました。

けれども、次の中御門天皇朝には異論が出て行なわれていません。それが次の桜町天皇朝（在位一七三五～一七四七）になつて、ようやく本格的な大嘗祭が復興されたのです。

今回の御讓位は、文化十四（一八一七）年以来二百年ぶりということ、光格天皇が注目されています。そのころ、高御座も詳しい考証に基づき、立派に復興されたのです。これをもつても、江戸時代二百数十年の間に、朝廷の儀式も御所の室礼も、だんだん復興されてきたことがわかります。

朝廷の大礼や神宮の遷宮に奉仕する人々

ところが、幕末（一八五四年）の安政大火によって、京都御所も焼けてしまいました。そのため、明治天皇の即位式には、高御座を用意することができず、代わりに日常的な御帳台が使われました。明治神宮の聖徳記念絵画館に、その「即位式」の図が描かれておりますが、それをみても簡素な御帳台であったことが分かります。

ついで明治期に入つて、先ほど申し上げました皇室典範の規定ができました。また、二十年後の明治四十二（一九〇九）年

に「登極令」という代始儀式の詳しい施行細則まで作られます。それに基づいて、大正四（一九一五）年の即位礼は京都御所で行なわれたわけです。

その際、新たに高御座と御帳台を造立することになりましたから、大礼使と宮内省のもとで、関係者の皆さん、とりわけ京都の職人さんたちが大変な努力をされたようです。

私は昭和五十六（一九八一）年から京都産業大学に勤めまして、平成の初めころ近代大礼の展覧会を開催するために、京都の伝統工芸を担う人々にお話を聞いたことがあります。また、昭和四十一年から九年间勤めております伊勢の皇學館大学で、同四十八年の第六十回式年遷宮に向けて造営の奉仕される神宮の宮大工さんに会つて、いろいろな苦勞話を聞く機会もよくありました。

そうした職人さんたちは「何とか立派なものを作らなければ」と苦心されてきました。そして異口同音に「神さんや天皇さんは、普通の人が見えるところまでお見通しやから、表も裏も手を抜けん」「神さん天皇さんに喜んでもらえれば、こんな名譽なことはない」とおっしゃっていました。

そういう純粹な気持ちや真剣な心掛けがあるからこそ、本当の伝統は守り伝えられてきたのだなと、つくづく感心したことをよく覚えております。

大嘗祭は一代一度の格別な「大新嘗祭」

もう一つ、即位礼の後に行なわれる大嘗祭で供えられる神饌のお米と粟について申し上げます。

大嘗祭とは一体どういってお祭なのか。これについては従来、いろんな説明や解説がありまして、三十年程前までは、「大嘗祭は天皇が人間から神になられる秘儀だ」というような解釈が、かなり行なわれていました。

しかしながら、私の知る限り、そのようなミステリアスなものではないと思われれます。そもそも天皇は神ではありません。あえて申せば、われわれと同じ人間であられます。けれども、普通の人間では及びもつかない格別な御方だから尊いのです。

本質的に重要なことは、皇祖神と信じられる天照大神をはじめ歴代の皇霊もまた全国の天神地祇もあわせて仰ぎ祀られる。そのような神々に額づかれ、ひたすら国家の安泰と国民の幸せを祈り続けられる。そういう「神聖な祭り主」であられるということがあります。

従って、一代一度の大嘗祭も、天皇が神になるというようなことではありません。昨日、「古代の皇位継承」に関する研究発表会が國學院大学で行なわれました。そこでも同大学の岡田荘司名誉教授が基調講演において、大嘗祭は基本的に、天皇が毎年行なわれる新嘗祭を特別丁寧に営まれるものだ、ということをも明快に述べておられました。

かつて「大嘗祭は摩訶不思議な秘儀だ」などという奇説に尾ひれをつけ、だから「大嘗祭はケシカラン」とか「憲法に反する」と思い込んだ人々が訴訟まで起していました。しかし、毎年十一月二十三日に天皇がみずから新嘗祭をやっておられることには、ほとんど誰も文句を言いません。そうであれば、新嘗祭と基本的に同じことを行なわれる大嘗祭に対しても、文句を言われる筋合いはないはずです。

念のため「大新嘗祭」といいう方は、すでに奈良時代の称徳天皇という女帝の時の史料にみられます。『続日本紀』の引く称徳天皇天平神護元（七六五）年十一月庚辰の詔に「今日は、大新嘗のなほらひの豊明聞し行ふ日に在り……」と記されています。大嘗祭は格別な「大新嘗祭」にはかならない、という基本をしっかりとご理解いただければと思います。

神々をもてなす「ニヘアヘマツリ」

そこで、新嘗祭にも大嘗祭にも使われている「嘗」という漢字の意味を調べてみます。たとえば、殷代以来の文字を長らく研究してこられた白川静氏は、「嘗」について「神が供饌を受けて食する」ことが原義だと解釈しておられます。

一方、新嘗祭を一般に「にいなめさい」と申しますが、大和言葉で訓めば「ニヘアヘマツリ」だという説が宜しいと思われるます。ニイは「贄」、つまり神々へのお供え物です。またアヘ

は「饗」、つまり持て成すことです。今でも「アへのコト」という民俗行事が能登半島などに残っていますが、これは田の神様を家に迎えておもてなしをするのです。

ですから、お供えを差し上げて神々をもてなす「ニヘアヘマツリ」が「ニイナメサイ（新嘗祭）」にほかなりません。

この新嘗祭は、日本列島で稲作の広まった弥生時代ころから、各地で行なわれてきたとみられます。その一例として、今から千三百年ほど前の奈良時代にまとめられた『常陸国風土記』の「筑波郡」条に、次のような古伝がみえます。

古老曰く、昔神祖尊……筑波岳に登り、亦宿止を請ふ。この時、筑波神、答へて曰く、「今夜新粟嘗すと雖も……」、……飲食を設けて敬拜祇承す。

これをみましても、遙か昔から、関東地方でも新穀をお供えして神様をもてなす祭りをしていたことが分かります。ただ、この『風土記』で注意すべきは、新嘗を「新粟嘗す」、つまり新穀の粟を贅として神さまを饗すと書いていることです。

この「粟」は、下に米の字が付いているのだから、この場合の粟は米を意味すると言う説もあります。しかし、むしろ常陸あたりでは、粟をお供えすることが古来の祀り方だったことを、物語的に伝えているのだろうと思われれます。

粟については、『続日本紀』に引く霊亀元（七二五）年十月七日の詔に「陸田の利……粟……諸穀の中、最も精好……耕種

せしめよ」とあります。つまり、陸田の利として粟はいいものであるから、みんなで作るように、という政府からのお達しです。これは粟の重要性が認識されていたことを示していると思われれます。

たしかに粟は重要です。古来の日本人は、縄文時代に畑地で粟などを作ってきたようですが、弥生時代から水田で稲作を中心とするようになって、水田で作るお米が穫れないような時に備えて、畑で作れる粟や稗や黍や豆などを一緒に作ってきたわけですね。

大嘗祭・新嘗祭で供えられる米と粟

そこで、お米と粟が並んで大嘗祭に供されたことを示す確実な史料を見ていきます。

まず記紀神話には、お米と粟の両方がちゃんと出てきます。『日本書紀』の「神代」に「天照大神、喜びて曰く、この物は則ち顕見しき蒼生（人々）の食ひて活くべき物なり。乃ち粟・稗・麥・豆を以て陸田の種子とす。稲（米）を以て水田の種子とす……」とみえます。

つまり、畑で穫れるものと水田で穫れるもの両方の出現を、太陽神のごとく称えられる天照大神が喜ばれ、日本人が生きて行くのに食物として大事なものだ、と仰せられたという古伝を大切にしてきたのだと思われれます。

よく「五穀豊穰」と申しますが、お米以外の雑穀も含めて、豊かに穰ることを祈るわけです。その両方とも用意しておくという知恵を、我々は神話からも学ぶことができます。

ついで十世紀初めに勅撰された『延喜式』の「四時祭式」をみますと、「新嘗……御飯並びに粥の米各二斗・粟二斗」を用意することが定められています。

また、そのころから平安宮清涼殿の廊下に据えてありましたカレンダーともいえる衝立の「年中行事御障子」にも、その流れを汲む年中行事書にも、毎年「新嘗祭に供すべき官田（朝廷の直営田）の稲・粟の卜定文を奏する事」という一項目が記されています。

これらは毎年十一月の新嘗祭に供えられるお米と粟ですが、それのみならず一代一度の大嘗祭にも粟が使われてきました。そのことが明確なのは『後鳥羽上皇宸記』の建暦二（一一二二）年十月二十一日条（逸文）です。これは『大嘗会神饌秘記』とも称されていますとおり、後鳥羽上皇が跡継ぎの順徳天皇に対して、大嘗祭の進め方をお伝えになった記録です。最も重要な神饌のことは、正に一子相伝ですから、記録されたものが滅多にありません。たまたまこの御記に詳しく書かれており、その中に「御飯……米二杯、粟二杯」とみえます。

さらに江戸時代には、前述のとおり、戦国時代から二百年以上も中断していた大嘗祭が本格的に復活されたのは桜町天皇の

ときからです。その桜町天皇が記された宸筆の「笏紙」（京都御所東山御文庫所蔵の宸筆）に、「神供次第、よね（米）、あは（粟）、平で（平手）にもる。……天皇……よね三はし（箸）、あは三はし、なめてたつ」と明記されています。

その上、大正に次いで行なわれた昭和三（一九二八）年の『昭和大礼記録』を調べましても、悠紀・主基の斎田でとれた新穀で調進された米御飯と粟御飯、米御粥・粟御粥が記されています。この御飯は蒸した強飯、御粥は炊いた御飯です。

以上から分かりますように、大嘗祭・新嘗祭というのは、お米の祭りだと思われていたかもしれませんが、あわせて粟も大事にされてきたのです。

毎年の新嘗祭、一代一度の大嘗祭では、お米が中心になってからも、粟などを粗末にせず、むしろ水田でとれる平常食のお米だけでなく、陸畑でとれる非常食の粟なども忘れてはならない、という知恵が込められていると思われれます。

各地から奉納の由加物と庭積机代物

もう一つ付け加えますと、かつての大嘗祭では、この他に朝廷と関係の深い紀伊や阿波から「由加物」と呼ばれる様々な海産物が供されました。『延喜式』をみますと、「凡そ神御に供すべき由加物」が具体的に何種類も挙げられています。それはおそらく千数百年前より由緒ある他方から納められていたものと

みられます。

それが明治の大嘗祭から「庭積机代物」^{にちづみのつくえしろもの}として供えられるようになった（明治四年『大嘗会雜記』）。それは初め悠紀国あたりからのものに限られていましたが、ついで大正の大嘗祭から全国に広げられています。昭和四年と平成二年の大嘗祭でも、全国各地から海産物、野菜・果物、鳥獣などが数品ずつ献納され、大嘗宮（悠紀殿と主基殿）の前の帳殿にずらりと並べられるようになったのです。

これらを見ますと、大嘗祭というのは、皇室だけのお祭りではなく、今や全都道府県の協賛により行なわれる日本人に不可欠な食べ物祭りの祭りだ、といつてよいと思われまます。

あらゆる作物が収穫できるのは、人間の力だけではありませぬ。天地自然の力、とりわけ太陽の恵み、「お天道さま」のお陰がなければ、うまくできません。ですから、それを神々のご加護のお陰だと実感し、いつも感謝するような気持ちは、とても大切なのです。

ちなみに、平成の大嘗祭で「庭積机代物」として供進されたものを別表（次ページ）に挙げました。例えば、ここ千葉県からは「ピーナツ、さつまいも、しいたけ、のり、鰹節……」が供納されています（参考までに令和大嘗祭の庭積机代物一覧表も付載します）。

このような全国からの特産物を「神様の賜物」^{たまわりのもの}（賜ぶ物、タ

ベモノの語源）として、単なる餌のように横から摂るのではなく、贈り物として上から頂く。だから食事の前に「いただきます」といって感謝するわけです。それを年中行事として行うのが新嘗祭であり、一代一度の代始祭礼として行うのが大嘗祭であるといつてよいと思います。

日本文化の原点を見直す大嘗祭の意義

このような自然に対する、また神々に対する感謝の心こそが日本文化の根底にある大切なものです。毎年丹念に土を耕し、種を蒔いて、作物を育てる。そういう不断の営みこそ、日本人の生きる底力です。そうして収穫されたものを神々にお供えして感謝する毎年の新嘗祭、また一世一代の大嘗祭が、全国の人々の協賛を得て末永く継承されていくことが重要です。

このたび「令和」という新元号の御代始めを、みんな明るく晴れやかに迎えることができました。これは常に国家国民全体のことを考えられ、その安泰と平安を祈り続けてこられた平成の天皇陛下が、近代以降まったく例のない譲位を決断されたお陰であります。そして新天皇陛下が即位され、明るい新たな御代を迎えることができたわけでありまます。

それを広くご理解いただく一環として、今回この展覧会と講演会を催しましたところ、多くの方々にお越しいただき、心から感謝しております。ご清聴ありがとうございました。

A 平成大嘗祭の庭積机代物

(悠紀地方)

Table with 6 columns: 都道府県名, 精米, 精粟, 特産品1, 特産品2, 特産品3, 特産品4, 特産品5. Lists various products from different prefectures like Hokkaido, Aomori, etc.

(主基地方)

Table with 6 columns: 愛知, 三重, 滋賀, 京都, 大阪, 兵庫, 奈良, 和歌山, 鳥取, 島根, 岡山, 広島, 山口, 徳島, 香川, 愛媛, 高知, 福岡, 佐賀, 長崎, 熊本, 大分, 宮崎, 鹿児島, 沖縄. Lists products from various prefectures.

(AもBも、精米は各1.5kg、精粟は各750gを供納)

B 令和の大嘗祭の庭積机代物

(悠紀地方)

Table with 5 columns: 都道府県名, 品名, 目録, 備考. Lists products for the Reiwa Great Harvest Festival.

(主基地方)

Table with 5 columns: 都道府県名, 品名, 目録, 備考. Lists products for the Reiwa Great Harvest Festival, including items like tea, rice, and other regional specialties.

※Aは宮内庁編『平成大礼記録』、Bは宮内庁大礼委員会資料より (Bの各右端○印は精粟を供納。全国47のうち1都1府23県)